琉球大学学術リポジトリ

平成18年度「海外文化研修」報告書

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学大学教育センター 公開日: 2018-07-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金城, 宏幸, 吉井, 巧一, 石川, 隆士, 與儀, 峰奈子, 宮里, 厚子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/41687

平成18年度「海外文化研修」報告書

欧米系言語教員海外文化研修委員会
委員長　金城宏幸（スペイン語）
吉井巧一（ドイツ語）
石川隆士（英語）
與儀峰奈子（〃　）
宮里厚子（フランス語）

1. はじめに

外国の言語文化や地域社会について学習する者にとっては、たとえ短期間ではあっても現地をじかに体験することは極めて有意義かつ刺激的であり、その学習効果も大きい。法文学部国際言語文化学科の欧米系3専攻では、平成9年度の学科新設に伴って、新カリキュラムに「海外文化研修」を授業科目（4単位）として導入し、集中語学訓練やホームステイなどを通したコミュニケーション能力の向上と異文化理解の深化を図るべく、海外での研修を実施してきた。

平成18年度9月には、特別企画として、言語・文化の研修のみならず、プログラムの後半に4言語グループ（英、独、仏、西）がブリュッセルで合流してEU（欧州連合）の主要機関を訪問しながら学ぶ4週間の研修を実施した。この企画の特色は、これまで各言語履修コース（専攻）が別々にそれぞれの研修を行っていたことに対して、今回は共通部分を設け、各グループがそれぞれの国での研修を終えたのちに、全員で共通のテーマに関するセミナーを受講しながら周遊するということである。この企画は、欧米系教員合同会議の海外文化研修委員会を中心に進めてきたものであるが、他大学にも例のない、内容的にも独創的な研修計画であった。これまで各言語コースで研修を企画・引率してきた教員が、その経験を集大成し、ヨーロッパの言語・文化に関する新たな教育方法を模索する中で着想されたものである。実施に際しては、EU駐日欧州委員会代表部の全面的な協力とサポートがあった。

今回のプロジェクトの主たる目的は、現代ヨーロッパを理解するうえで欠くことのできない欧州連合（EU）について学ぶ契機にすることと、同科目を共通教育の外国語関連科目や他の専門科目と連動した外国語教育の中核的・総合的な専門科目へと位置付け、発展させることにあった。参加を希望する学生には、共通教育の外国語科目（6～8単位）と専門科目の「ヨーロッパ文化論」（2単位）を必修とし、「EU研究入門」（2単位）を推薦科目として課した。教員側の予想はある程度的中し、これらの外国語科目における学生の学習意欲は普段より高く、関連授業群を活性化する一定の効果があったように思える。多くの学生が関心を示し、法文学部が中心とはいえ、学内全学部からの参加者があり、特に「EU研究入門」においては、新設科目ながら85名の受講者があった。

さて、現地での研修を行う約1年前から、こうした関連科目群を連動させる形で研修地の言語文化や社会事情に関する準備をさせて実施に臨んだわけだが、最終的に55名の学生（英語班21名、ドイツ語班16名、フランス語班8名、スペイン語班10名）に5名の教員が引率することになり、正規授業科目として実施される海外研修としては、おそらく本学最大のものであった。以下に、各言語グループの研修の様子をそれぞれの担当教員が概説し、本研修の成果に関する全体的な自己評価を試みる。4言語共同のEU研修部分の詳細については、Till Weber准教授に英文で別に記述していただくことにする。

2. 各言語グループの研修形態

1)「英語グループ」

英語圏への海外研修としては短大部以来長い歴史を持つが、今回は初めて英語の母国である「英国」における研修となった。参加者は 21 人で、内訳は法文学部国際言語文化学科 16 名、総合社会システム学科 2 名、医学部 3 名。男 9 人、女子 12 人のという内訳である。

後半の EU 研修に合流するまで、イングランドでの滞在は 10 日間、そのうち語学研修としてヨーク大学のプログラムに参加したのは 1 週間と、4 言語グループ中最も短いものとした。その理由は費用である。現在非常に換算レートの高い英国においては滞在費がかさむ。最終的には最も短い滞在期間にもかかわらず 4 言語中最も高い費用となった。

しかし、ヨーク大学における研修は非常に充実しており、そのコストパフォーマンスは最大であった。特にこれまでいくつかの大学の研修プログラムを実際に体験してきた（ハワイの場合は研修をコーディネートするワークショップにも参加した）経験から言えば、ヨーク大学の内容はベストであった。研修前から説明を受けていたが、それは英国式のトレーニングに基づく。つまり単に知識の詰め込みではなく、常に学生の主体的な発信に重きを置いているのである。それゆえたった一週間にもかかわらず、すべての学生が最終講義で魅力的なプレゼンテーションを行うことができた。

また、ホームステイ先のクオリティの高さも特筆すべきものがあった。これまでの研修先では必ず大きなトラブルに見舞われた。それはホームステイがひとつのビジネスに堕してしまっている結果であるが、今回はヨーク大学自身が入念に選考した家族が配されており、学生自身との事前のやり取りを積極的に奨励するなどの手厚い配慮がなされていた。もちろん通学距離の不公平など、まったくトラブルがなかったわけではないが、学生たちは大いに満足したようであった。

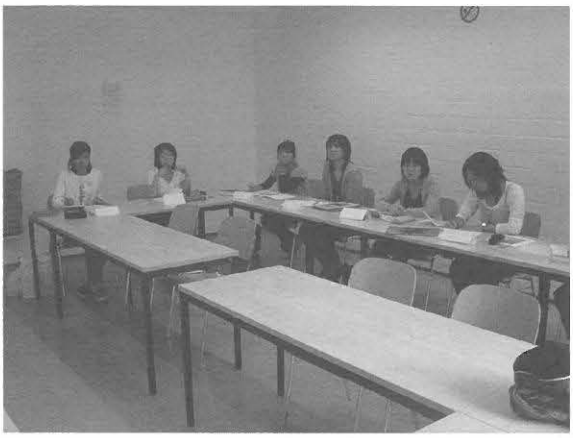
（文責：石川隆士、與儀峰奈子）

2)「ドイツ・グループ」

参加学生 16 名は、まずクラス分けテストの結果により二つの学習レベルに分かれて、協定校であるデュッセルドルフ大学にて 2 週間の集中語学研修(午前中のみ)を行った。その間、一人ないしは 2 名でホームステイ(1 名のみ本人の希望により大学学生寮へ)。ホームステイ先の家族は、このような、まだドイツ語が十分に話せない外国人学生に理解のある人たちが厳選されており、この点で参加者の満足度は極めて高かった。詳細は参加者へのアンケート結果の分析を読んでいただくとして、言語のトレーニングだけではなく(10 日間の授業のみで飛躍的に語学力がつくとは受講者自身も期待していない)、異文化との直接の触れ合いや交流という観点から、ホームステイ先の「良し悪し」は、海外研修全体の評価や満足度を左右する非常に重要なファクターである。授業、それに週末の遠足や多彩な学外プログラム（デュッセルドルフ旧市街「アルトシュタット」散策、オペラ「カルメン」鑑賞、ケルン市街「大聖堂」訪問、オーバーハウゼン「巨大ショッピングモール」で買い物、ボン市街「ライン川」散策、ネアンデルタール「歴史博物館」見学、「水族館」見学、サッカー試合「ブンデスリーグ」見物）に参加する時間よりも、ホームステイ先の家族と身振り手振りで沖縄のことを話したり、一緒にテレビを見たりする時間のほうが多いし、何よりも、この人と今コミュニケーションしたい、しなければならないという必然性があるので、学習意欲も自ずと高まる。

初めての、慣れない外国生活を経験した参加者の中には、緊張のあまりか体調を崩したり、真夜中にホームステイ先から引率教員の携帯に、「学生がまだ帰宅しない」という連絡がきてあわてたり(バスに乗り間違えた)、それなりの小さな「トラブル」もあったが、参加者全員にとって、極めて密度の濃い貴重な異文化体験ができた 2 週間であったと思われる。

（文責：吉井巧一）



（語学研修の様子、ドイツ語）

3)「フランス語グループ」

フランス・グループには 8 人の参加者があり、専攻学生こそいなかったが、法文学部・農学部・医学部と、少人数の割には複数の学部から参加があった。

琉球大学はフランス本土に 4 つの協定校を有しているが、地理的条件や語学学校の有無とその開講時期等が本研修にうまく適するものがなかったため、パリにある私立の語学学校を研修校とした。参加者は研修校のホームページを通じて出発前にレベル分け試験を受け研修に臨んだ。各クラスは 10～12 人程度で、先生方の教え方も分かりやすかったと学生達は満足していたが、パリの語学学校がたいていどこでもそうであるように、(特に初級)クラスの日本人受講生の割合が高く、日本で授業を受けているようだったとの声も聞かれた。

滞在形式は、語学学校の紹介してくれたフランス人家庭でのホームステイだった。ホストファミリーは様々で、複数の学生を受け入れている家庭もあったようだが、学校が同一国籍の学生は一緒の家庭に入れないという方針を取っていたこともあり、授業中とは違い、基本的には家に帰ると日本語が使えない状況に学生たちはおかれていた。ちなみに、参加者のほとんどは「基礎フランス語 I・II」と「基礎フランス語会話」を履修したに過ぎず、その状態でホームステイさせるのは不安もあったため、出発前の夏休み期間中に補習を行い、そこでホームステイで必要になるであろう表現を学習する一方、相手の言うことが分からないときはどうするか、どのようにすれば会話が膨らむかなど助言も与えておいた。

学校と家庭以外では、語学学校が開催する週に 1～2 度のアクティヴィティーや週末の遠足に参加し、それ以外の日は、参加者たちは基本的に自由にパリ観光をして放課後を過ごした。出発前は自分たちだけで行動することを不安がっている者もいたが、自分でプランを立てて行動したため、研修の後半 2 週間で団体で見学した観光地よりも、一つ一つの場所が鮮明に記憶に残っているようである。

その他フランス・グループでは、その年の 10 月から本学に教育実習に来ることになっていたパリ第 7 大学の学生に連絡を取り、滞在期間中数回パリの案内をしてもらったことも特筆しておきたい。参加者全員が会うことはできなかったようだが、フランス人学生と交流できたことに学生たちは非常に満足していた。さらに一部の学生は、そのフランス人学生が琉球大学滞在中、引き続き交流を深めていたということも付け加えておく。

また、研修後、学生たちは「EU とフランス」というテーマでレポートを仕上げることになっていたが、その参考資料とするため、パリ滞在中にアンケート用紙を作り学校の先生やホストファミリーに答えてもらっていた。帰国後に集まり、アンケートの回答を各自で訳してもらった。経済、文化的アイデンティティなど会話では到達することができなかったレベルの話題を改めて文字で見ることで理解が深まり、それなりの学習効果があったようである。

最後にフランス・グループの研修を総評すると、参加者の評価が高かったのは、2 週間同じ場所に滞在し語学学校に通ったことで落ち着いて学習できたという点と、自分たちで計画を立てて観光できたという点である。一方で、今回は専攻生がいなかったということもあるが、せっかく研修に参加しても、帰国後もフランス語の学習（履修）を続けている学生が半数しかいないことも事実である。今後副専攻制度が導入されれば状況は変わる

かもしれないが、学生がパリに行っただけで満足するのではなく、研修後もモティベーションを維持したまま学習を続けていけるような環境作りが、フランス語コースの今後の課題といえよう。

（文責：宮里厚子）

4)「スペイン語グループ」

スペイン語班への参加者は、法文学部から５名と農学部３名、そして工学部２名の計 10 名であった。9 月 1 日から 28 日までの全旅程のうち、4 言語グループが合流するまでの前半 16 日間がスペイン語グループでの研修であった。

語学研修とホームステイは、バルセロナを中心に教育事業を展開する民間の語学スクールに委託した。語学スクールの選定にあたっては、まず研修適地をバルセロナと定めた上で、少人数クラスであること、レベル別にクラスが編成されていること、受講生の国籍が偏っていない（受講生の共通語が日本語でない）ことなどを考慮し、ホームステイに関しては学校から比較的近くて便利な家庭を選んでもらうよう強く要望した。現在スペインの都市部では、スペイン語を学びに来る外国人留学生の増加とも相まってホームステイが単なる“下宿屋”となり、ひどいときには一度に 6～8 名の学生が居て、初日と最終日以外は家族とろくに会話もできないような場合もある。幸いなことに、今回の我々のグループは殆どの学生が適当な家庭を選定してもらい、交通の利便性や食事の内容もさることながら、十分に会話の練習にも応じてくれたようである。1 週間という短い期間ではあったが、学生たちは集中語学訓練を通して様々な国からきた留学生と知り合うと同時に、自身の外国語コミュニケーション能力の現状を知り、親切な家族のおかげでスペイン人の生活の様子を垣間見ることができたのである。観光地としても知られるバルセロナのこと、世界遺産に登録されるガウディの建築作品群やピカソ美術館、闘牛やサッカーなどを満喫したのはいうまでもない。

8 日間の語学研修とホームステイを済ませた後はアンダルシア地方を周遊し、グラナダやセビーリャの街を散策しながらアルハンブラ宮殿の見学や本場のフラメンコショーなどを満喫した。この頃になると、学生たちも、街中でのスペイン語の実践にもいくらか慣れてきたことを実感するようで、それに応じて効率的な団体行動と各自での自由行動を適宜織り交ぜるように留意した。これまでの経験から、バスを団体で借りて周遊する場合など、経済性と効率性がある反面、自由行動が少なすぎると訪問地の印象も薄く、欲求不満が残るということが判ったからである。

大都市バルセロナに到着した直後から各自で地下鉄に乗り始めた学生たちは、スペイン最後の訪問地であるマドリッドに着く頃にはすっかり街歩きにも慣れており、1～3 名でガイドブックを見ながら美術館や史跡などを縦横無尽に動き回っていた。加えて、油断しているとスリにやられるという、“貴重な”実体験もしたのである。

スペインでの研修を終了した我々は、4 言語合流地のブリュッセルに向かう途中に２泊３日のパリ観光を組み入れた。学生の要望も考慮した欲張りの旅程であったが、本人たちは大いに満足したようだ。こうしてスペイン語班の研修を無事完了し、パリ北駅でフランス語グループと合流してブリュッセルに向かったのである。

3. おわりに（研修の評価）

こうして、先駆的で画期的な内容の研修を終了したわけだが、はたしてその成果はどうだったのだろうか。その評価については様々な角度からの検証が可能だと考えられるが、参加した学生たちの声に耳を澄ませるのが最も妥当な方法の一つであろう。まとめとして、学生へのアンケート調査を主に参考にしながら、その成否の部分を自己分析してみたい。

研修の全日程を終了してフランクフルトから帰路に着いた際、我々は機内で学生全員に質問紙を配り、今回の研修に関するアンケート調査を行った。４５名（約８割）から回答が得られたが、図１に見られるように、全体的に学生の満足度は高かったようだ。無論、こうした新企画が最初から

万全であるわけはなく、自由記述などを読むと不備を指摘する声も散見される。帰国後の生の声なども合わせながら、良かった点や不満だった点などをより詳しく分析すると、今回の研修に対する学生側の評価はおおむね次のように集約されるようだ。それぞれ満足度や不満度の高さを示すような順序で並べてみる。

A.良かった点

1）実地体験することで、外国（ヨーロッパ）の歴史や文化に対する強い関心を覚えた
2）ホームステイ先の家族が親切で素晴らしい人たちであったのが良かった
3）意思疎通がうまくできない苛立たしさから、外国語によるコミュニケーション力の重要性を痛感し、語学学習への意欲が高まった
4）訪問地事情に関する知識の乏しさを痛感し、翻って自国（地域）や身の回りの事柄に対する認識の必要性を感じた
5）自分で地図やガイドブックを見ながら異国の地を歩いたのが印象に残り、自信にもなった
6）EU 議会議員との対話など、学生ではとても調整出来ないようなことが体験できて良かった

B.不満だった点

1）スケジュール、特に後半の EU 研修部分が過密すぎて自由時間もなく、多くを見た割には印象も薄くなりがちであった
2）4 言語グループが合流した後の EU 研修部分は何しろ人数が多すぎて、時間的なロスも多かった
3）現地での語学研修におけるクラスのレベル分けが考慮されてない。受講期間が短すぎた。
4）ホテルのグレード（EU 研修部分の）が低く、多人数でのバスルームの共同使用など、余計に疲れが溜まった。
5）正規科目で「研修」であるという意識の薄い学生が参加しており、一定の基準で選抜されてないことに疑問を感じた。
6）ワイン・テイスティングは一回で十分だと思った。

こうした学生の意見に対して、企画・引率した教員自身の評価はどうかというと、総勢 60 人という団体で多国間を移動するという旅程にもかかわらず、これといった大きな事故もなく終了できたことが何よりだったというのがまず正直な感想である。同時に、内容的には画期的で、主要な部分が独自企画・直接手配ということもあり、極めて安価な旅費で実施できたという達成感もあった。しかしながら、今回のような初の試みという部分が多い研修には反省点も少なくなく、次の企画に活かすべき点として次のようなことが担当教員にほぼ共通する意見ではなかろうか。

1）人数が多いことによるコスト面や手配面でのスケールメリットはあるが、今回のような大人数で団体行動するのはデメリットもある。研修形態や旅程にもよるが、15～30 名程度が適正人数であろう。

2）海外での研修を実施するに際しては、研修目的に応じて参加者をいかに選抜すべきか考慮すべきである。年間を通した事前学習のカリキュラムを整備しながら学生の学習意欲などによるスクリーニングは可能ではないだろうか。

3）学生にとっては研修費が安価なほど好まれるのは言うまでもないが、ただ安ければいいというものでもなく、旅行中に過度の疲労が溜まらないような宿泊施設やスケジュールに留意すべきである。

4）上記とも関連するが、学生にとって印象に残るのは、“自分で体験する”ことであり、教員の目線で効率よく多くを見せるだけではなく、参加者が自分で行動する部分をバランスよく組むべきである。

5）外国語力の飛躍的な向上というより、学習へのモチベーションを高めるのが重要な目的の一つであるとすれば（実際にその効果が十分に見られるが）、卒業旅行というよりは、2 年次の学生が

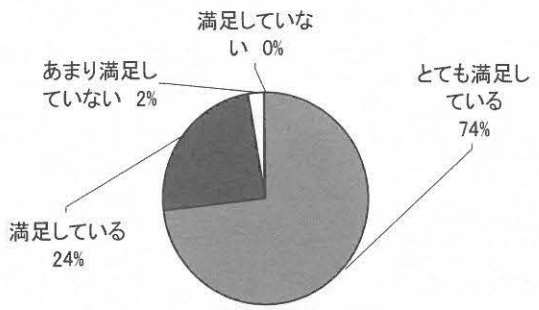
参加するのが理想的かもしれない。

6）本学の協定校での研修が目的であるなど、各言語グループによる研修形態が異なるのは当然だが、できれば集中語学研修は少人数クラスでレベル分けされ、さらに他国の留学生と共に受講すればより刺激的である。

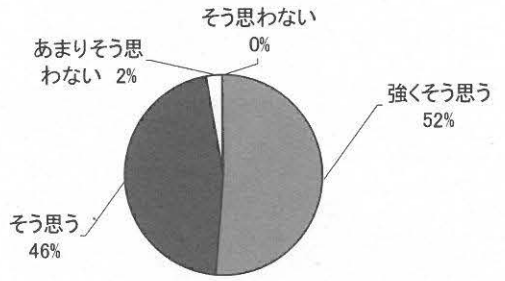
あらためて今回の研修を振り返ってみると、初めての企画形態ということもあり、その準備と引率には多大なエネルギーを要し、担当教員にはかなりの負担が強いられたのはいうまでもない。しかしながら、学生の海外（ヨーロッパ）への関心と外国語習得への意欲を大いに喚起したことを鑑みれば、共通教育の外国語コースや他の専門科目との連動性を深めつつ、「海外文化研修」を外国語教育の中核的・総合的な学科目として戦略性に位置づけることが可能であろう。上記のような学生からの声を汲み取りながら、これまでの経験と反省点を次回へ活かし、この先駆的で独創的な試みをさらに発展させることは大学全体にとっても有意義なことだと確信する。

資料:アンケート調査(研修の評価)の集計結果

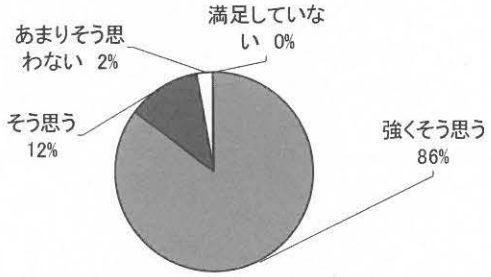
1. 海外文化研修の総合評価



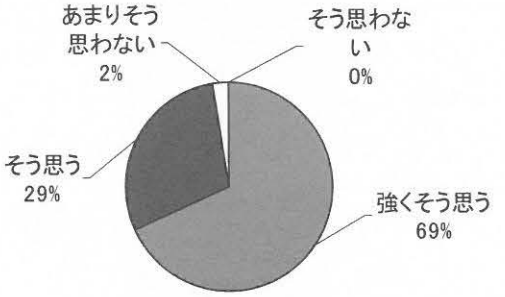
2. 海外文化研修の体験は語学力向上に役に立ったと思う。



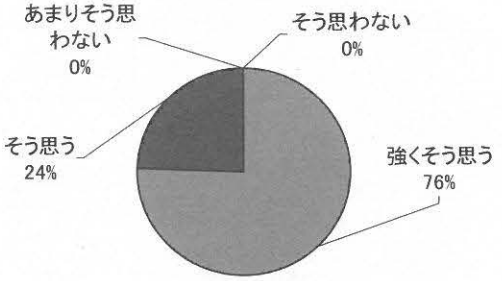
3. 海外文化研修旅行に参加することで更に言語、文化、歴史に対する興味・関心が高まった。



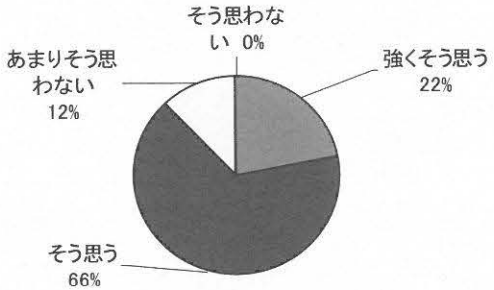
4. 研修を通して自分自身の普段の習慣や自国の文化などについて考えさせられた。



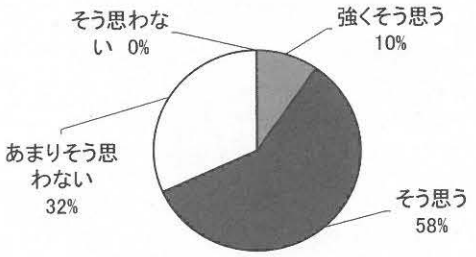
5. 研修は、精神的にも学問的にも得るものがあった。



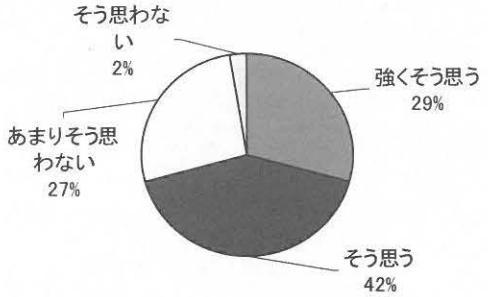
6. 旅行前のオリエンテーションは役に立った。



7. 前学期3回の集中講義(ヨーロッパ文化論)は有意義であった。

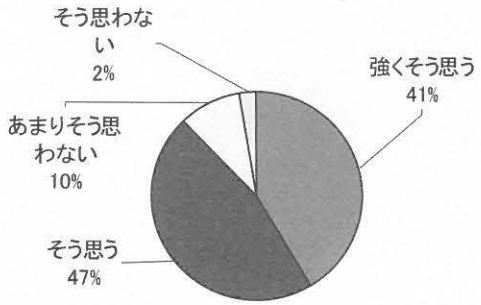


8. 集中講義で言語レッスンを準備・担当したのは語学学習上いい体験であった。

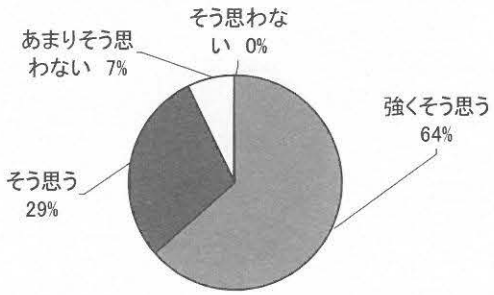


資料：アンケート調査（研修の評価）の集計結果

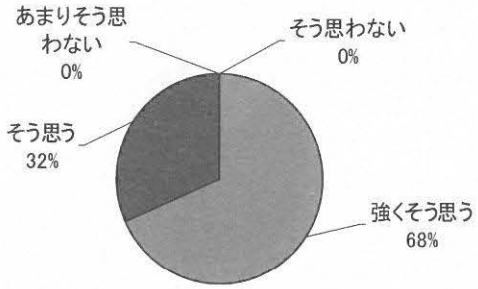
9. 研修先での語学スクールの内容（カリキュラム、教授法など）は充実していた。



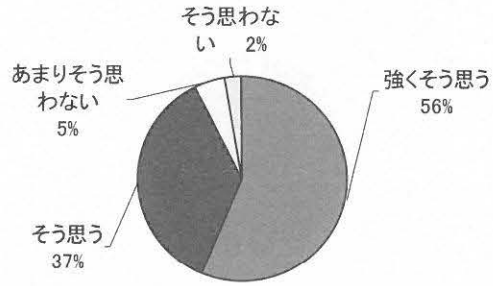
15. 今回EUツアーに参加したことで、EUやヨーロッパに関する認識が深まった。



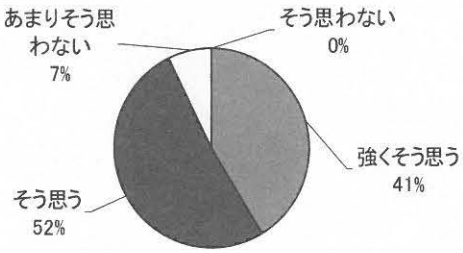
11. 研修先でのホームステイは全体的に有意義であった。



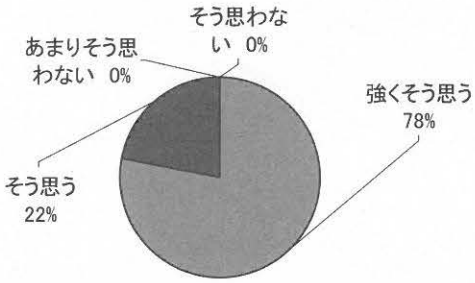
16. 今回の海外文化研修の費用は、内容を考慮すると比較的リーズナブルであった。



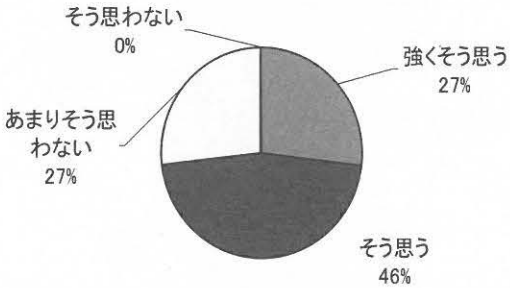
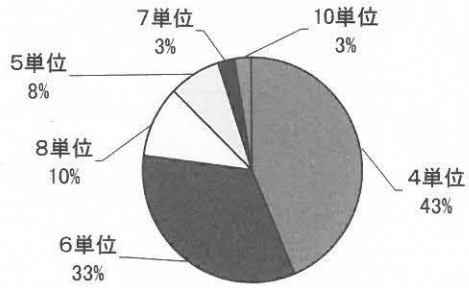
13. 研修先の国での授業以外の活動や、フィールドトリップ、観光、見学には満足している。



17. 海外文化研修への参加を後輩にも勧めたいと思う。



14. 4言語グループ共通のEUツアーは有意義なプログラムであった。



18. 海外文化研修は4単位ですが、他の授業科目などと比較して実際には何単位の比重があると思いますか。